書　評

田畑久夫著：『木地屋集落－系譜と変遷－』

古今書院　2002年8月

A5判　341頁　7,200円（本体）

本書の著者田畑氏は，すでに中国雲貴高原のフィールドサーヴェイの成果や鳥居龍蔵論を公刊され，民族学者としてもご活躍である[1]。同時に本誌の読者にとっては，1976年～1981年の『歴史地理学紀要』に木地屋集落研究を掲載した著者としても知られていることと思う。本書は，田畑氏の提唱する「木地屋集落」，すなわち日本の山村のなかでも特に木地屋（木地師・轆轤師）が形成した集落を論じたもので，木地屋に関わる氏の初めての著書であり，2001年度に岡山大学に提出した博士論文に基づくという。地理学者の手になる木地屋の専論としては，1977年の渡辺久雄氏の著作以来となる[2]。そこで本書評では，地理学の木地屋論あるいは山村論が現在どれほどのレベルに到達しえたか，という視点から読み進めていきたい。

はじめに本書の構成を示す。

序　章
第1章　「山村」の性格と研究動向
第2章　木地屋集落に関する研究とその問題点
第3章　木地屋集落の変遷過程
第4章　揖斐川上流の木地屋集落の変遷
第5章　大山北麓の木地屋集落の変遷
第6章　白馬岳山麓の木地屋集落の変遷
第7章　奥三河における木地屋集落の変遷
第8章　信濃における木地屋集落の変遷
付　論
第1章　中国雲貴高原の木地屋集落
第2章　ベトナム北部の杓子屋

以上のように11の章から構成され，序章～第3章が方法論ないし総論的議論を，第4章～第8章が木地屋集落の事例研究を，付論の2章が東アジア・東南アジアにおける海外調査の一端を示すものとなっている。以下，各章ごとに論評していきたい。

序章は著者の地理学観を吐露するもので，フィールドサーヴェイが即ち地理学なのでなく，学際的な視野をもちつつ「地理学プロパー固有の一般法則」を確立すべきことが主張され，本書が照葉樹林文化論や文化生態学と関連することが示唆される。ただし記述／法則定立という捉え方や，「一部ではRadical Geographyを中心に地理革命が唱えられているが，まだその声は大きくない」という注記からは，著者の地理学観のベースが1950～1970年代の地理学方法論論争にあることが窺われる。評者はここに世代差のようなものを強く感じたが，続く第1章・第2章における学説史の検討は，「法則」を探求する著者の軌跡として読まれるべきであろう。

第1章で著者は地理学における「山村」概念を検討し，千葉徳爾や松山利夫の文化地理学的な定義と，藤田佳久の現代的な定義の二者に整理していく。著者の立場は前者を継承するもので，ただ山地にあれば「山村」と解釈するのでなく，「原初形態」（proto-type）における山地資源の採集利用を重視し，さらに「移動性」を強調する定義を示す。そして「山村」の類型として「狩猟集落」・「木地屋集落」・「焼畑集落」の3者が提示されている。

以上の定義は，文化地理学的な「山村」概念を極めたものともいえるが，評者の立場から見るならば[3]，さらに検討すべき余地が残されているように思う。一つは，安定的な山村集落が形成された時点で，本来的な生活様式とされる「移動性」が失われることになる以上，集落として安定的に発展すればするほど，「山村」としての原初の性格を失うという，定義上のジレンマが生じることである。

また「原初形態」の時代として漠然と中世が措定されているが，全く実証を伴わないまま狩猟集落・木地屋集落・焼畑集落の3類型を想定しうるか，という疑問が残る。文化地理学でも千葉や松山が，また歴史学でも笹本正治が[4]，多様な生業を山村の特色として強調している。これに比して著者の定義では，木工専業が山村の原型として意識されるためか，それ以外の生業の多様性には余り重点が置かれないまま，類型化されているように思われる。加えて，地理学の枠内に限定したまま，中世～近代を射程に入れた「山村」概念を検

討しうるのかどうか，それが果たして「学際的」な議論につながるのか，一抹の不安が残るところである。

第2章では，木地屋とその集落に的を絞った方法論的議論が中心となる。著者はロクロの使用を木地屋のメルクマールと規定し，ロクロを持たない杓子屋については，木地屋よりも成立が古いと想定しつつも，研究対象から除外する（付論を除く）。また古代の轆轤工は山地を移動する「山民」ではなく，移動性をもつ「木地屋」の成立は室町時代末期だと推定する。本章のもとになった論文の初出後，橋本鉄男が中世の職人・工人としての轆轤師について研究を深めている[5]。本章では橋本の成果への言及がないが，いずれにせよ古代～中世のロクロを扱う集団は，山深くに住む人々というよりは，多種多様な工人・職人の一つであったといえる。

とすれば，彼らが本格的に山地に展開していくのは，人口増加によって椀や鉢，盆への需要が飛躍的に高まり，山林資源の枯渇が具体化しはじめた近世になってからの可能性が高いのではないかと評者には思われる。この点は，第1章における「原初形態」の時期設定とも大きく関わるところであり，中世の「木地屋」をどう位置づけるかが，課題として取り残されることになろう。なお本章後半では，杉本壽の「氏子狩帳」研究への批判が展開され，杉本の提示した近世の木地屋人口が過大に見積もられていること，山村の全てを木地屋起源と考える杉本説が誤りであることが明快に論じられている。

第3章は「木地屋集落」の総説ともいうべき内容となっている。まず著者は，5万分1地形図の地名に基づき，木地屋集落の分布が九州から東北地方に及ぶことを確認している。2万5千分1地形図や県別地名辞典を併用すれば，さらに精度の高い分布図が作成できよう。ただし，本文中では木地屋が集合し，木地業を専業としている集落として「木地屋集落」が説明されているが，同時に注において，本文中で論じた意味の「木地屋集落」は非常に少なく，既存の集落に木地屋が移住した場合が多い，と推定されている。ちなみに第4章では，「例えば『氏子狩帳』に記載されるなど，かつて何らかの方法で木地屋と交渉をもった集落」とする「木地屋集落」の定義が，注として記されている。これが最も広い定義の仕方になると思われるが，本書の主題である「木地屋集落」概念が揺れているようにみえるのは，読者を混乱させることにならないだろうか。

ともあれ，続けて著者は「氏子狩帳」を多面的に分析し，正保から明治におよぶタイムスパンのなかで，木地屋の分布と戸数の数量化を行っている。ただしそれは単純に各地の戸数の変動を示すものでなく，年度ごとの「氏子狩帳」の精度の差異にも疑問を投げかけるもので，文政10年と明治5年の「氏子狩帳」のみが人別帳的性格を備えていたという著者の指摘は大きい。「氏子狩帳」は最近改めて翻刻され，利用が容易になったが[6]，史料批判的な留意が常に不可欠となろう。最後に著者は，先行研究を総合しながらも，自身の聞き取り調査の成果をまじえつつ，木地屋の生産技術を概説している。なかでも樹種の選定と植生の関わりは，照葉樹林文化との関連を重視する著者ならではの強調点となっている。

以上の第3章までで本書の頁数のちょうど半分が割かれ，第4章より事例研究の収録となる。とくに第4章～第6章は近世に重点があり，第7章・第8章は明治期が焦点となる。

第4章は岐阜県揖斐郡久瀬村小津を事例とするもので，「氏子狩帳」，木地屋文書，過去帳などを史料として，「農村」としての小津村の周囲に木地屋が住み着き，栃をめぐる軋轢が生じていたこと，「氏子狩帳」に記載されていない木地屋が存在し，18世紀中頃には定住する木地屋一家が存在していたこと等を見出している。ただし明治中期までに，小津の木地屋のほとんどは移住していったという。ここからは，木地屋自身が伝えた古文書史料の検討が重要であること，また行政村としての近世村落との関係が，近世の木地屋集落を位置づける上で大きな論点となることが分かる。

第5章は鳥取県東伯郡赤碕町大父木地を事例とする。第4章と同様に本村（大父）に対する枝村（大父木地）として木地屋集落が形成されたケースであるが，第4章とは異なり，18世紀後半より耕地を開墾して農業集落へと転換していったことが論じられている。ただし，ここでは古文書史料が失われ，ご子孫からの聞き取りが論拠となっている。興味深いことに，ご子孫の家は，かつて県議会副議長を輩出する旧家であったといい，政治

家・資産家として成功した状況は，漂泊する零細な職人という木地屋のイメージとはかなり異なるものであろう。

第6章は新潟県糸魚川市大所木地屋を事例とする。第5章と同様に近世後期において開墾に成功した例であるが，伝えられた古記録（「万年帳」）からその過程を窺い知ることができる。それによれば，信越国境地帯を転々と移動していた木地屋が，天保期の二度目の挑戦で定住に成功し，明治以後，飛躍的に分家と水田面積が拡大したことが分かる。また定着以後も木地業は継続しており，廃業のための定住でなく，木地屋として存続するための定住であったといえる。なお木地業は昭和43年まで続いたという。

第7章は，明治18年に豪農古橋家の計らいにより成立した集落，愛知県北設楽郡稲武町井山を事例とする。奥三河は，「氏子狩帳」の分析からも，近世中期以降の多数の木地屋の定着／移動が窺われる地域である。古橋家が彼らに手を差しのべた背景には，植林の下準備を木地屋に担わせること，そして古橋家の一族が木地問屋を営んでいたことがあったとされるが，集落自体は20年後には消滅し，木地屋は霧散したという。著者は，戸籍に関わると思われる役場所蔵史料から，木地屋の在住期間や姻戚関係を復原している。この事例は，第6章よりも時期が新しいにも関わらず木地屋自身が伝えた史料が無く，著者の苦労が窺われるところである。

第8章は，唯一現存する木地屋集落として著名な長野県木曾郡南木曾町漆畑を事例とする。ただし明治13年に定住が始まった本事例については，孫の世代の手記がすでに公刊されており，これに依拠する部分が大きい。また本章の初出を収録した文献の性格もあって，著者は「氏子狩帳」によって近世信濃の木地屋を概説した以外には，役場資料と聞き取りから若干の補足を行うに止めている。

日本の木地屋集落の検討は以上であり，付論では，中国貴州省のミャオ族・トン族自治区の木地屋集落，およびベトナム北部のモン族の杓子作りという貴重な事例が報告されている。いずれもそれ自体，興味深いものであるが，著者の意図は照葉樹林文化論と木工技術の関わりにあるように見受けられる。これに関しては別途用意されているという『照葉樹林文化論の背景とその展開』において，併せて論じられることと期待したい。なお付録の文献目録は有益であるが，残念ながら1990年代以降の文献はフォローされていない。

さて，ここで第4章から第8章を振り返ってみれば，5つの事例は，定着の成否や転身の形態，明治期の動向という点で，いずれも異なっている。木地屋の定住ないし集落形成をめぐる歴史的展開には多様な形があって，簡単に総括するのは困難であるといえよう。しかし第4章・第6章のように，木地屋自身が伝えた古文書ないし古記録が発掘され，いささかなりとも集落形成の様相が窺えることは，「氏子狩帳」のみに依存した木地屋研究が散見される中で，著者の成果として高く評価されよう。序章で著者はフィールドサーヴェイとしての本書の意義を強調してはいるが，18～19世紀の木地屋に迫るためには，やはり聞き取り調査のみでは限界があり，むしろ木地屋サイドの一次史料の有無と実証主義的アプローチが鍵を握っているといえる。

これに関して評者が惜しく感じるのは，近世の木地屋を受け入れる側となる地元の村落の村方史料の検討が，ほとんど試みられていないことである。近世において木地屋が集落を形成する場合，それが最初から法的な村として独立する可能性はありえず，既存の藩政村に属す集落として処遇されるのが一般的であった筈である。木地屋が一時的に滞在し，村の所持林を利用する場合も，その村との関わりを持たざるをえない。近世の村制度と木地屋の関わりは，著者が目指す「木地屋集落」研究にはそぐわないかもしれないが，山村の自治体史では取り上げられることが多く，重要な切り口となるのではないだろうか。

ところで著者は第7章において，「さらにより多くの事例を収集して，厳密に木地屋の集落という概念を提出したい」と述べており，最終的な「木地屋集落」の概念規定を今後の課題とされているように拝察される。「氏子狩帳」のみに頼るのでなく，現地調査を幾度も重ねた著者だからこそ，「木地屋集落」概念を定義することの難しさに，かえって直面することになったのであろう。とはいえ，第1章で著者が「原初形態」とした中世の「木地屋集落」もまた，あくまで理念的に措定された作業仮説に止どまり，なおブラックボッ

クスであることに留意しなくてはならない。

ここで「山村」という枠組みから離れるならば，古代～中世の轆轤師は，「山民」というより，まずは職能者の一人であった。彼らが近世以後も，「山村」以外の地域における椀・鉢・盆などの需要に支えられて初めて存続していた人々であることを，忘れてはならないだろう。最近，木村裕樹が指摘しているように，木工業・漆器産業の最前線にいる職人・工人として木地屋を捉えていくアプローチは，近世～現代を通じて未開拓のままに置かれている[7]。

木村論文が雄弁に物語っているように，「山村」としての木地屋集落が廃絶しようとも，木工職人としての木地屋が消滅したわけではない。木地屋の本質は山村民という点にあるのでなく，木工職人たることにあると規定するならば，「木地屋集落」とは，木地屋たちがより奥地の林材を求めて生みだした近世特有の現象だったと捉え返すことも，あるいは可能であろう。その際，奥地を移動する彼らをサポートしたシステムに迫る手がかりは，「氏子狩帳」ばかりでなく，問屋サイドの史料のなかに見出されるにちがいない。

今後，本書が与えてくれた様々な手がかりをもとに，多様な視角からの木地屋と木地屋集落，そして山村の研究が展開することを期待して，結びとしたい。

（米家泰作）

〔注〕

1) 田畑久夫・金丸良子『中国雲貴高原の少数民族』，白帝社，1989，166頁。同『雲貴高原のヤオ族－中国少数民族誌－』，ゆまに書房，1995，221頁。田畑久夫『民族学者鳥居龍蔵』，古今書院，1997，263頁。
2) 渡辺久雄『木地師の世界』，創元社，1977，201頁。
3) 米家泰作『中・近世山村の景観と構造』，校倉書房，2002，366頁。
4) 笹本正治『山に生きる－山村史の多様性を求めて－』，岩田書院，2001，508頁。
5) 橋本鉄男『ろくろ』，法政大学出版局，1979，444頁。同『漂泊の山民』，白水社，1993，245頁。
6) 永源寺町史編さん委員会編『永源寺町史　木地師編』滋賀県永源寺町，2001，上巻1142頁，下巻548頁。
7) 木村裕樹「会津漆器産地における木地屋の集団的性格と木地屋集落の変容」，歴史地理学43-4，2001，1-17頁。